

の理念型から大きく外れる者であっても、また、修行や入巫儀礼を経ない者であっても、イタコを名乗ることが可能である。

(事実、インターネット上では「イタコの電話占い」等のサイトが乱立している。)しかし、その正当性を裏付ける地域の評判といった内実が伴っていない「イタコ」を名乗り続けるためには、自らの存在を、別の何らかの手段で正当化し続けなければならぬという事態が生じている。急速に変化する現代社会の中で、巫者はどのようにして社会と関係を取り結んでいくのか、呼称の問題を通してその一端を明らかにした。

大衆文化としての「イタコ」とオカルトブーム

大道 晴香

イタコは青森県から秋田県・岩手県に分布する民間巫者であり、特定の地域に根付く民俗文化であるにも拘らず、その存在は現在、テレビや雑誌を通じて全国的に広く認知される状況にある。しかしながら、民俗文化としてのイタコと、マス・メディアによって形成された大衆文化としての「イタコ」との間に隔たりが存在しており、後者は前者の有り様にも影響を及ぼす点で、民俗文化領域の研究を行うにあたっても決して無視することの出来ない事象となっている。

論者はこれまで、大衆文化としての「イタコ」の具体相を、活字メディア(新聞、雑誌)より明らかにしてきた。現在までに得られた結果を概観すれば、「イタコ」が活字メディアに登場し始めたのは一九五〇年代のことであり、「恐山」という場を通じて「恐山のイタコ」に注目が集まった結果、六〇年代の

時点で「イタコ」は既に一定の知名度を獲得していた。そして、こうした「イタコ」の知名度をさらに高めることとなったのが、続く一九七〇年代に生じたオカルトブームである。オカルトブームは「イタコ」の定着を促がすと同時に、従来のイメージを大きく転換するターニングポイントであったとみられる。

以上のような問題意識のもと、本発表ではオカルトブーム影響下の言説として中岡俊哉『死霊を見た! 最後のミステリー・ゾーン「恐山」の神秘』(二見書房、一九七七年)を取り上げ、本書における「イタコ」の様相とブーム以前に出版された一般書におけるそれとの比較を通じて、オカルトブームによる「イタコ」の再表象について考察を行った。

比較の結果として明らかとなったのは、オカルトブーム前後の「イタコ」における「担い手」の違いであり、端的に述べれば、そこには「他者」から「我々」へという変化が生じていた。まず、オカルトブーム以前において「イタコ」の「担い手(利用主体)」として想定されていたのは、「東北の善良な主婦たち」や「素朴な参詣人」といった語で表される「他者」であり、決して「語り手」およびその視点を共有する「読み手」によって形成される「我々(大衆)」ではなかった。「我々」に与えられた立場とは、あくまで「イタコ」およびその「担い手」を「見る(観る)」立場であり、「口寄せをしてもらう」立場ではなかったのである。つまり、オカルトブーム以前の「イタコ」とは、『他者』の文化・風習であったということが出来るだろう。

これに対して、オカルトブームの影響下で書かれた中岡の『死霊を見た!』の場合には、言説における「語り手」自身が積

極的に口寄せをしてもらう立場にあり、その体験談に多くの頁が割かれるという特徴が確認された。すなわち、本書が「イタコ」の「利用主体」として想定しているのは、他でもなく言説の「語り手」自身であり、ここには「他者」から「我々」へという、「イタコ」の「担い手」の変化を見て取る事が出来る。

また、本書が「口寄せの体験」において最も重視するのは、口寄せの内容の「当否」についてであり、この点からは、「オカルト」という枠組みが「イタコ」を「死者を憑依させる」という「宗教性」の観点から価値付けるものであることが分かる。したがって、「オカルト」としての「イタコ」とは、その「宗教性」の「担い手」を「我々」と規定する点で、イタコの有する「宗教性」の大衆化をもたらしたと述べる事が出来るだろう。確かに、「イタコ」は六〇年代の時点で一定の認知を得ていた。しかし、「担い手」と「宗教性」を大衆に開いたということからすれば、七〇年代のオカルトブームこそが、大衆文化としての「イタコ」の浸透・定着における一つの重要なターニングポイントだったのではないだろうか。

宗教者の性格と役割について

佐藤 憲昭

釜石市のシャーマニズムは、現在、その中心であるカミサン（シャーマン）が減少すると共に高齢化のため、住民はカミサンに代わり、他地域のオガミヤや日蓮宗僧侶に依頼をするという「シャーマン―依頼者」関係を見せている。こうした宗教者は三種を数える。

第一は、釜石市近在のオガミヤで、一人存在する。彼の呪術―宗教的性格は、神霊を身体に付着させたり、あるいは神霊の姿や声を目・耳にしたりして、神意を伝える予言者型を示す点にある。同時にまた、巫女とコンビを組み、神霊を目にしながら操作する精霊統御者型として、憑祈禱形式において儀礼を執行している。この儀礼で注目されるのは、霊媒の役割を担当する巫女が、自己の身体に憑入している神霊に連れられて、魂が身体から離脱し、依頼要件に関係する遠方の場所（例えば、東京）まで飛んで行き、事実を確認して帰って来るといった脱魂状態を介しながら、儀礼を展開している点である。この儀礼においてホトケオロシも行っている。

第二は、釜石市周辺及び岩手県南部に所在する日蓮宗寺院の僧侶であり、三人存在する。彼らに共通している呪術―宗教的性格は、予言者型を見せている点にある。ある僧侶は、寄台（霊媒）とコンビを組んで寄加持と称する憑祈禱形式の儀礼を執行し、精霊統御者型を示している。また、別の僧侶はホトケオロシを執行しているが、彼は、自己の身体に憑入したホトケが、自らの口で語る内容を半分くらいは理解できるとのことであるから、彼は霊媒型と予言者型との複合型を示しているといえよう。

第三は、釜石市及びその周辺と岩手県南部に所在する日蓮宗寺院の住職であるが、特に霊断師の資格を有している僧侶であり、三人存在する。そのうちの一人は、シャーマニックな性格を発揮しているので、彼を第二の宗教者の枠に入れると、霊断師は二人となる。この霊断師とは、人間の意識の裏側にある第